

# 羽目になる

レジでおつりをもらう時に、「瞬耳を疑った。「今、百円玉がございませんので、おつりに十円玉が混ざる羽目になりますか、よろしいでしょうか？」と言われたのだ。羽目とな？カチンときかけたところで、ちよつと考える。なぜ店員さんはそんな言葉を使ったのか。

言葉選びの正誤は別にして、これは思いやりの表現なのだろう。店員さんは私を思いやり、私の立場になってみた。すると十円玉ジャラジャラは堪え難いほど惨めに思えた。レジに並ぶタイミングが悪かったために、この人は十円玉まみれ。痛いほど分かかりますよ、その悔しさ。そこで出てきた言葉が「羽目」だった。

そう考えて私のカチンが消えた後、また別の思いが頭をもたげた。私は財布が十円玉まみれになって、それほど惨めに感じない。でも店員さんはそう感じるらしい。この思いやりというやつは、図らずも、自分が相手の立場になった時にはこう思うとい

うことを相手にさらけ出すことになるのだ。

翻ひるかえつて、おつりが十円玉だらけになることは、それほどいけないことだろうか。百円玉切れになるなんてよくあることだろう。その状況を惨めに感じるのはおかしい。

では、十円玉まみれを惨めに思う人間だと思われないように相手を思いやるにはどうしたらいいのか。つまり、相手の立場になることによって映し出される自分の見え方を気にして、相手の立場になるなり方を考える必要があるということになる。なんだか訳が分からない。合わせ鏡のラビリンスに迷い込んだようだ。自分を見失う。

店員さんは何と云うのが正解なのか。「おつりが十円玉になります。申し訳ありません。」これだいたいと思う。「よろしいでしょうか？」と相手を思いやる必要もない。そもそもよろしいかと聞いて、嫌だと言われたらどうするのか。断らないだろうという前提の丁寧さであれば、どこかいやらしい。

思いやりはすばらしい。だが、状況に応じた自分の考えを正直に偽りなく伝える力もまたすばらしい。相手の立場になるという蓑笠みのかさに隠れない、頼らない。こうして思いを綴つづることで、私は面倒くさい人間だと思われる羽目になりはしないか、不安は残る。



1975年、静岡県生まれ。会社員、グラフィックデザイナーを経て、絵本作家になる。いろいろな職業の職場を訪ねる「しごとば」シリーズ(プロンズ新社)が人気を博す。『しごとば 東京スカイツリー』で第62回小学館児童出版文化賞、『ぼくのトイレ』(PHP 研究所)で第17回日本絵本賞読者賞を受賞。著書に、『かわ』(幻冬舎)、『そだてば』(朝日新聞出版)、『とんでもない』(アリス館)、『おならをならしたい』(小学館)などがある。